

「白馬山案内人組合」の維持要因に関する考察 —移住者の継続的存在と地域特性に着目して—

佐藤大輔・林 正羽・黒田創將・呉羽正昭

本稿は、長野県白馬村の観光地域としての発展に大きな役割を果たしてきた「白馬山案内人組合」を対象に、組合の維持要因を移住者の継続的存在や白馬村の地域特性とともに解明することを目的にした。白馬山案内人組合は登山基地に根付くローカルなガイド組織として日本最大規模の組合員数を維持しているが、その9割以上が移住者である。ガイドの移住を継続的に可能にしている要因は、冬季のスキー及び夏季の登山関連の仕事の存在、そして端境期には緩く広い人的ネットワークが仲介する多種多様な仕事が存在していることである。また地域文化として登山ガイドなど山に関わる人の地位が高いこと、「バム」と呼ばれるアウトドアスポーツをライフスタイルの中心におく人を許容する空気や多様な移住者を受け入れる素地があることが明らかになった。さらに、優れた山岳環境へのアクセスの良さという、白馬村が有する地理的条件の影響も大きい。これらの諸要因がアウトドアスポーツを生業とする移住者を惹きつけていると考えられる。

キーワード：白馬村、山岳リゾート、ガイド、移住、持続可能性

I 序章

I-1 研究背景と目的

長野県白馬村は日本でも有数な登山基地のひとつとして発展してきた。そこでは山岳ガイドの集団、白馬山案内人組合が、1919年に成立した。その後、大正年間には、北アルプスの東側に同様の組合規約をもつ複数の登山案内人組合が結成された。1917年に大町登山案内人組合が組織されたことを筆頭に、常念口（1918）、有明（1918）、堀金（1919）、小谷などの登山案内人組合が成立した。しかし、2023年現在、そうしたガイド組織の縮小がみられる。組合員は、大町登山案内人組合の41名を除けば、他の登山案内人組合では10数人から20数人程度に留まっている。それに対し、白馬山案内人組合は、2024年に111名の組合員を擁し、地域登山ガイド組織として国内最大規模を誇っている。

ところで、白馬山案内人組合の組合員の9割以

上は白馬村域外からの移住者である。松村ほか（2019）は、南信州地域のガイド組織が地域の学校登山のガイドや安全登山の啓発、山岳遭難防止対策など、一定の役割を担っているものの、ガイドの高齢化や、専門ガイドの少なさなど持続可能性に対する課題を指摘した。一方、白馬村では移住者が継続的に居住し、またガイドやその組織と関わり続けるのかについては疑問である。地域資源の再発見・再評価を相対的に実施する能力を有する外部者、ここでは移住者組合員の視点を分析することで、白馬地域が登山ガイドを惹きつけている実態が解明できると考えられる。さらに地理学の視点で、白馬の地域特性と関係させてガイド組織及び山岳リゾート地域の持続可能性を検討する必要があるであろう。

以上を踏まえ、本稿では「白馬山案内人組合」の維持要因を、移住者の継続的存在や白馬村の地域特性とともに解明する。具体的には、組合員が白馬地域に移住を決断している理由、移住後の職

業選択や年間のライフサイクルに着目し、白馬山案内人組合が大規模組織を維持している要因について、白馬村の地域特性とともに考察する。

まず、Ⅱ章では白馬山案内人組合の成立の背景と組織成立の経緯、さらにその後現代に至るまでの発展過程を明らかにする。Ⅲ章では、移住者である組合員にアンケート調査を実施し、その属性や移住動機、仕事内容について分析し、移住要因や移住後に従事するガイド業以外の生業とも関係づけて検討する。Ⅳ章では、組合員への聞き取り調査を通して、移住に至るより詳細な経緯や、ガイド業務を含めた生活の年間サイクルを明らかにすることで、移住を可能にしている経済的な背景を明らかにする。Ⅴ章では、これら組合員の移住要因と経済的な背景について、白馬村の地域特性とともに考察を行う。なお、本研究の現地調査は、2023年10月および2024年5月に実施した。

Ⅰ－２ 研究対象地域

1) 研究対象地域の自然景観

長野県白馬村は西に白馬連峰と東の小谷山地に挟まれた標高700mほどの白馬盆地を中心とした村である。白馬連峰は後立山連峰の一部で、南から五竜岳(2,814m)の北、白岳(2,541m)から白馬岳(2,932m)を主峰とする白馬三山、三国境(2,715m)を経て小蓮華岳(2,769m)へ伸びる山並みを指しており、富山県との県境を成している。そのほとんどが標高2,500mを越える高山帯ゆえに高山植物が豊富で、白馬連山高山植物帯は、国指定の特別天然記念物に指定されている。村の中心部を南北に糸魚川－静岡構造線(フォッサマグナ西縁)が走り、白馬連峰から東面に流れる松川、平川が白馬盆地を通り姫川に合流して日本海に向かって北流している。

気候は冷涼で、最も暑い8月の平均気温が22.6℃、12月から2月の平均気温は氷点下となっており、3月でも1.2℃である(白馬村HP)。冬季はシベリア高気圧からの北西季節風が日本海側の山脈に多量の降雪をもたらしている。白馬連峰においても多量の降雪をもたらすものの、稜線西

側は北西風の風衝地にあたるため、降雪は飛ばされ積雪は少ない。一方、風背の稜線東側が多量の積雪となる。さらに稜線上の東側に雪庇が形成され、それらの落雪や雪崩により急峻な雪食地形を形作り、白馬連峰は西緩東峻の非対称山稜となっている。さらに白馬連峰の東面には落雪や吹き溜まり、雪崩などにより沢筋には多年性雪渓が複数みられる。多年性雪渓は、冬季の積雪が夏季においても溶けきらず越年するものをいい、万年雪ともいう。気温がより低くければ氷河となり、気温が高ければ消滅するため、多年性雪渓は降雪の涵養と積雪の消耗の収支バランスが拮抗する地域でしかみられない。近年、調査によりその一部(カクネ里氷河、唐松沢氷河)が流動していることが確認され氷河と認定されている(福井・飯田2023)。一方、白馬大雪渓は多年性雪渓の代表的なものである。白馬尻から白馬岳頂上直下まで雪渓が延びていることから、登山道が整備されていない近代登山黎明期より白馬岳山頂への最短ルートとして利用されてきた。また、白馬連峰は白馬盆地から延びる尾根(八方尾根、遠見尾根等)が直接、白馬連峰の主稜線に続いており、白馬大雪渓同様、近代登山黎明期から登山ルートとして開かれてきた。さらに白馬盆地から白馬連峰の雄大な景色が見渡せるのも大きな特徴である。

2) 白馬村における集落の観光化

元来、白馬盆地は寒さの厳しい積雪寒冷農業地域であった(浅川1964)。稲作も雪解け水を使うため生産量は多くなく、多くの農家で養蚕、馬匹生産、大麻生産が行われていた。副業として薪炭・藁細工・炭俵作りが行われていた。しかし、1920年代半ばに山岳スキーが普及しはじめると、顧客は次第にスキーの行き帰りにガイド役である山案内人の自宅(農家)に宿泊するようになった。当初は山案内人の好意によって宿泊のサービスが提供されていたが、昭和恐慌の影響で生活が窮乏している農家に客が謝礼を支払うようになり民宿業が始まった(石井1977)。これが日本最初の民宿地域形成へ繋がる。戦後もスキー客は急増し、農

家は蚕室を客用に転用し、耕運機の普及により馬匹飼育が不要になると、馬匹用納屋の客室への改築などが進んだ。また、稲作も稲作技術の進歩があり、生産性が著しく向上したこと、また顧客への食用米が必要となり、保有米を増やすために米づくりに力を入れた（浅川1964）。このように民宿業は本業である農業の妨げにならず、副業として行われ、農家は稲作と民宿の複合経営が定着した（石井1977）。

また、集落の後背地には茅場があり、茅は屋根葺き、炭俵製造に利用され、また馬匹飼育のための干し草の採集場も存在した。茅場斜面は、その傾斜が緩やかで、スキー導入初期にはスキー斜面に当てられていた（石井1977）。

第二次大戦後、1954年に細野地区（現八方地区）の山案内人が中心に設立した細野名木山リフト会社が名木山に木柱リフトを完成させた（細野スキークラブ1989）。その成功が呼び水となり1958年に東急系資本が白馬に進出し、八方尾根スキー場にロープウェイを、麓の和田野地区に白馬東急ホテルを建設している。その後はリフトの架設ラッシュもあり、白馬村では急激なスキーリゾートの発展がみられた。一方、旧来からの茅場・採草地・雑木林は不要となり、スキー場や別荘地として開発された。石井（1977）は、積雪寒冷農業地域であったことによる農業の低生産性が民宿経営を始めとする観光開発には好都合であったと指摘している。

しかし、白馬村では、バブル経済の崩壊後、1990年代半ばからスキー観光は急激に停滞していく。日本経済の停滞と共に日本のスキー観光のマスツーリズムの諸課題が表面化し、スキー離れの要因になったと考えられる（呉羽2009）。

2000年代に入ると、白馬村では外国人スキーヤーはパウダースノーを求めオーストラリア人を中心に増加した。ゲストとして滞在した一部の外国人はホスト化しており、インバウンドの発展によりスキーリゾートの構造が変化してきている（吉沢2022）。

さらに、2010年代に入ると、積雪量の減少など

気候変動への関心の高まりもあり、冬季に収益が偏る構造から脱却するため、冬季以外のグリーンシーズンの集客を増加させるための試みも始まった。2016年には白馬村観光地経営計画が制定され、滞在型でオールシーズンリゾートを目指す基本方針が示されている。小谷村の梅池エリアではアスレチック施設、白馬村内の岩岳エリアでは索道の最上部に白馬三山が見渡せるカフェやMTB（マウンテンバイク）の滑降コース、八方エリアでもカフェや麓で足湯施設、五竜遠見エリアでも高山植物園（2000年開業）や複合アクティビティ施設など、それぞれのスキー場でグリーンシーズンに対応した集客設備が整備された。さらに、スキー場以外にも湖沼や河川を利用した水上アクティビティ（ラフティング、カヤック、キャニオニング、SUPなど）や熱気球、パラグライダーなどを行う事業者も増加している。さらに麓のキャンプ場も増加し、また大手アウトドアショップなどの進出も相次いでいる。元来、白馬連峰への登山により観光化が始まった白馬村であるが、本格的な登山者から、索道を利用したライトハイキングなど夏季の登山客の様々な需要に応じた集客に力を入れている（坂本ほか2019）。

Ⅱ 白馬山案内人組合

本章では、白馬山案内人組合創立100周年記念事業実行委員会が2019年に刊行した『白馬山案内人組合創立100周年記念誌 百年の息吹』に基づいて、白馬山案内人組合の特徴を述べる。

Ⅱ－1 歴史

1) 白馬岳登山の始まり

記録に残る白馬岳への初登頂は1883年（明治16）になされた。当時の北安曇郡長の窪田畔夫（45歳）、仁科学校長（後の大町小学校長）の渡辺敏（36歳）のほか、教員仲間の計4人に、一行が宿泊した四ツ谷（現白馬町）坂井屋の福島広吉、佐野の猟師で山岳通の田中兼次郎、さらに山案内人3人一行9人が8月21日、一泊二日の行程で白馬岳に

登頂した。山案内人は、営林署から官林の管理を任されており、測量関係者らと登行する細野地区の住民であると考えられている。

その後、1898年大町小学校長河野齡蔵と七貴小学校の松岡邦松が高山植物の調査目的で、山案内人とともに、大雪溪から白馬岳、白馬鑓ヶ岳、白馬鑓温泉を経由して二泊三日の登山をしている。翌年「植物学雑誌」などに白馬岳の高山植物について発表を行うと、白馬岳への植物学者の登山が増えていった。

1903年（明治36）、武田久吉は白馬の山麓の民俗を世に紹介し、地理学者山崎直方が白馬大雪溪で「氷河」の存在を発見し発表している。このように学術登山などで、白馬の魅力が世に広まると共に、多くの登山者が訪れるようになる。

その他、1901年に大雪溪付近で、1906年に大黒岳富山県側で銅の鉱脈が発見されると、二股から白馬尻まで、平川入りから大黒岳肩まで運搬道が作られるようになる。大正年間には八方尾根経由の道も作られた。これらのルートは鉱物の運搬には数年しか利用されなかったが、登山道がまだ整備されていない時期に登山者に利便を与えた。

1907年頃には日本の高山はほとんど登りつくされ、登山の主流は、それまでの登頂後は同じルートを下山する「単峰登山」から「縦走登山」へと移っていく。また、1901年には北安曇教育会が白馬岳で団体登山、1903年に大町中学校が21人で登山するなど、学校による「団体登山」が開始されている。さらに大正期には松本50連隊や、皇族の登山も盛んになった。このように、20世紀に入った頃より登山者が急増し、それに基づいて山案内人の需要が高まっていった。

2) 白馬山案内人組合の組織

前述のように明治末から大正期にかけて、登山者の増加と山案内人の需要が高まったことや1905年に設立された日本山岳会の要請などもあり、1917年（大正6）、大町の旅館「對山館」主人の百瀬慎太郎が大町登山案内人組合を発足させた。その後数年のうちに、北アルプスの信州側登山口

にて、赤沼千尋による有明、小林喜作が創立メンバーである常念口、百瀬彦一郎による中房、烏川、島々など同じ規約に基づく案内人組合が組織されている。

白馬村では1919年（大正8）に「白馬岳登山案内者組合」が組織された。最初の山案内人は25名で、全て八方尾根の麓に位置する細野地区の住民であった。松澤貞逸は、1906年、現在の白馬駅近くにあった「山木旅館」を実父の早世により17歳という若さで引き継ぐと、元々測量のために白馬岳頂上直下に造られ、使用許可を得ていた岩室を頂上小屋として営業を始めた。1908年には白馬尻小屋の営業を開始し、1916年には山木旅館を白馬館と名称変更した。白馬大雪溪のルート上に宿泊施設を整備するなど白馬登山の事業に注力した。

一方、この時期は細野地区の有志も山木旅館の近くに高山館という旅館を開業、長野県当局が計画していた主要山岳10箇所での石室建設計画の下、白馬岳頂上小屋下に石室を作り細野青年会が管理の委託を受けている。細野地区の山案内人・強力が、貞逸とは別に宿泊業に乗り出したのである。

1921年の白馬岳登山者は4,000人に達した。山小屋の建設が相次いだこと、交通機関の整備などが進んだこと、皇族の登山などが相次いだこともあり、登山人気が高まり、学校登山も増加したことから、山案内人の不足が生じた。

そのため、1925年、貞逸の発案で細野地区に偏っていた組合員を全村に呼びかけ登山案内人を募ったところ、細野地区のガイドも含めて60人が応募した。ここに「北城登山案内人組合」が誕生し、後の「白馬山案内人組合」に引き継がれていく。

3) 白馬山案内人組合の発展

1911年1月に上越市高田で、オーストリア・ハンガリー帝国のレルヒ少佐が日本陸軍にスキーを伝え、同年高田でスキーを学んだ大町中学校教師の里見源太郎が大町にスキーを伝えている（臼田2013）。白馬では神城小学校長の丸山新一郎、丸山吉雄が子供達にスキー教室を開いている（「白

馬のあゆみ」編纂委員会1994)。世界的には1924年にフランス・シャモニーにて第一回冬季オリピックが開催され、スキーが競技として採用され、同年に国際スキー連盟も組織される。

このような背景の下、白馬山麓でもスキーへの注目が高まっていた。貞逸は1924年に山案内人を対象としてスキー講習会を開催した。1928年には、スキー技術の向上を目的に細野地区の山案内人12人が「細野山岳スキー倶楽部」を結成した（細野スキークラブ1989）。この時期は夏山登山の大衆化と、スキー人気から冬山に入る客も多く、新しい技術であるスキーへの注目が高まった時期でもあった。スキーによる冬季のガイドが増えたため、年間稼働日数200日を超えるガイドも出現した。当時白馬村には旅館が1軒のみで、また登山には山案内人が必要であったため、次第に登山客は山案内人の家に宿泊するようになり、前章で述べた通り民宿集落形成へと繋がっていく。1932年には唐松頂上山荘、キレット小屋などが新設され、鉄道も信濃森上駅、信濃四ツ谷（現在の白馬駅）まで延伸し、登山者の利便性が増した。さらに中部山岳国立公園の指定などもあり注目が集まっていたことから、山案内人は学校登山の誘致・案内のために大都市の学校を廻っていたという。

ただし、戦争の影響もあり、1942年の1万人をピークに登山者は減少し、山案内人の応召もあり、1944年から1946年までは、組合活動は休止状態であった。実際、貞逸が自動車事故により亡くなり、1926年に組合長を引き継いでいた2代目組合長下川富男も1944年に召集を受け、翌45年6月中国にて戦死している。

4）第二次大戦後の白馬山案内人組合の変化

1946年に横沢幡郎が3代目組合長に就任し、組合は活動を再開する。戦後の混乱が落ち着き、社会が安定しだすと、登山者も増加し、1950年の大雪渓ルートの登山者は8千人を超え、翌1951年には3万8千人に激増した。

この時期、フランス隊による人類初の8000m峰アンナプルナ1峰の登頂がなされ、登山ブームが

起こっている。1956年には、日本山岳会隊によるマナスル峰初登頂がなされ、空前の登山ブームとなった。

一方で、1952年に西山（現岩岳スキー場）に、1954年細野名木山（現八方尾根スキー場）に木柱リフトが完成した。1958年に八方尾根に白馬ロープウェイが架設され、1961年に山小屋への物資輸送にヘリコプターが導入されると、山案内人による歩荷の仕事が減少していく。しかし、1956年には「北アルプス北部遭難者救助隊」が設置され、初代隊長に白馬山案内人組合6代目組合長の大谷定雄が就任した。1962年に「白馬村山岳遭難防止対策協議会」が組織され、各登山口に補導所（現・登山相談所）が設置され、山案内人は補導員（現・相談員）として従事した。1965年になると夏山常駐隊も配置され、山案内人の多くがその任にあたった。

さらに、地元の山案内人の中には登山ガイドより自身の民宿業を重視する者が増加した。こうした傾向が高度成長期の特徴である。このように、この時期は山案内人の役割変化、すなわち地元生まれの山案内人は減少し始め、地域外から白馬村に移住して副業で山案内人の資格を得るものが増えてきた。

白馬村への来訪者は、1960年で夏山18万5400人に対し、スキーは11万2400人であったが、1967年には夏山来訪者20万人と微増なのに対し、スキーは59万人と大幅に増加した。とくに1980年代は、空前のスキーブームもあり、山案内人は、冬は民宿業やスキー関連の仕事で働き、グリーシーズンは農業の傍ら学校登山の引率のほか、各登山口の補導所の補導員や夏山常駐隊員を行うものがほとんどとなる。山案内人の資格も夏の学校登山の引率のために取得するようになり、日常的には山から離れるものが多かった。

しかし、1990年代に入るとバブル経済が崩壊し、スキーブームが去ると、白馬村への来訪者も減少した。一方で、スノーボードの普及や、道具の改良が進んだBC（バックカントリー）スキーの愛好者が増え、スノーボードもゲレンデ外を滑る

BCスノーボーダーが出現する。

また、登山においても山岳ガイドの全国組織が立ち上がる時期で、1990年には日本山岳ガイド連盟が設立された。設立総会が白馬村で開催され、当時の白馬村長西澤泰が初代会長となっている。その他、全国的に中高年登山ブームや百名山ブームが起り、登山を中心としたツアーが数多く生まれ出したのもこの頃である。

2012年、長野県の信州登山案内人条例が施行されると、信州登山案内人の資格を取ることが白馬山案内人組合への加入要件となった。現在、白馬山案内人組合の組合員は全て、信州登山案内人であり、2024年現在111名の組合員中、9割以上が村外からの移住者となっている。このように、1990年代以降は地域外からの移住者が山案内人となり、また多様な活動スタイルが現れてきている。

Ⅱ-2 白馬山案内人組合の事業内容

白馬山案内人組合の事業内容は、第1表のように4つに分けられる。まず、各関係機関との連絡・協力業務という枠組みの中で、登山道整備、自然環境保全活動、学術調査への協力、山岳情報提供や信州山案内人組合での研修への講師派遣など多岐に関わる事業がある。

次いで、案内人組合独自の事業として、組合員研修会、救急法の講習会開催など組織内部に対する活動、ボランティアによる登山道整備や登山道情報の発信など外部への活動がある。3に該当するのは、様々な形態でガイドを手配する業務である。最後に遭難防止対策として、登山相談所の開設、遭難時の隊員派遣などの活動がある。

上記のガイド手配に関して、学校登山、一般、白馬マイスターツアーに分けてその件数をみる(第2表)。学校登山は計12件、ガイド手配数48人、

第1表 白馬山案内人組合の活動内容

活動種類	活動内容
1 各関係期間との連携・協力 (白馬村、白馬村観光局、山小屋、索道会社、北アルプス登山案内人組合連合会、北アルプス山岳ガイド協会、新潟大学、日本山岳救助機構合同会社)	貞逸祭(白馬連峰開山祭) 登山道整備 環境省グリーンワーカー事業(遠見尾根ルート) 氷河調査への協力 観光局WEBサイトへの山岳情報提供 信州山案内人能力向上研修・実技(講師派遣) 日本山岳救助機構合同会社(AUTHENTIC JAPAN)との山岳捜索・救助ネットワーク構築会議への出席 グリーンバトロール事業 白馬岳山頂郵便局通送業務 フリーライドワールドツアー白馬大会
2 案内人組合独自の事業	専門部会による活動(技術養成部、企画事業部、施設管理部、被服装備部) 山に眠る人々の法要、山の講 ミレーとのパートナーシップ 組合員研修会 ボランティア登山道整備 メーリングリスト利用による情報の発信、共有 登山道情報のメール配信 組合員證の発行 組合員相互の親睦 ガイド育成プログラム事業
3 ガイド依頼に関するガイド手配業務	学校登山、旅行会社、個人から組合への直接依頼に対するガイド手配 観光局白馬マイスターツアーのガイド手配
4 遭難防止対策(白馬遭対協としての事業、北アルプス北部地区山岳遭難防止対策協会と連携)	登山相談所開設 遭難救助に関する協力、救助隊員の派遣 遭難救助技術研修会等各種研修会への参加

(出典：令和5年度白馬山案内人組合事業報告により作成)

第2表 白馬山案内人組合のガイド実績（2023年）

依頼元	依頼件数（件）	ガイド手配数（人）	ガイド手配延べ日数（日）
学校登山			
八方池	6	38	38
丸山ケルン	2	5	5
唐松岳	1	1	1
唐松岳 1泊2日	1	2	4
小蓮華山 1泊2日	1	1	2
白馬岳 1泊2日	1	1	2
一般（旅行社・個人）			
日帰り	19	21	21
1泊2日	13	19	38
2泊3日	3	3	9
白馬マイスター			
1泊2日	5	10	20
2泊3日	5	10	30
撮影関係			
TV番組撮影	4	4	9
合計	61	115	179
（前年比）	（-16）	（-6）	（-19）

（出典：令和5年度白馬山案内人組合事業報告により作成）

ガイド手配延べ日数52日となっている。目的地は八方尾根、丸山ケルン、唐松岳という日帰りが多くを占める。1泊2日の日程であるのは、唐松岳、小蓮華岳、白馬岳でそれぞれ1件ずつであった。

旅行社や個人からのガイド依頼である「一般」は39件、ガイド手配数43人、ガイド手配延べ日数は68日で、総数では学校登山よりも多い。日帰りが件数では最多であるが、ガイド手配の延べ数では1泊2日が多くなっている。その他、白馬マイスターツアーは1泊2日、2泊3日がそれぞれ5件、ガイド手配数も5件となっており、ガイド手配延べ日数は、それぞれ20日、30日となっている。テレビ撮影も含めると、総件数61件、総ガイド手配数115人、ガイド手配延べ日数179日となっている。

前年実績より減少しているのは、2022年に新型コロナウイルス感染症の規制が緩和されて依頼が急増したからであり、2023年は、コロナ禍前の水準に戻った。最後に、グリーンパトロール事業は、合計47日、計7名が参加し116人日分となっている。

Ⅲ 移住者ガイドの特徴

Ⅲ章ではオンラインで実施した移住者に対するアンケート調査の内容とその結果について記す（注1）。調査は2024年5月に無記名で実施され、19名から回答を得た（白馬山案内人組合員総数111名；回答率は17.1%）。回答数は19であったが、組合員のうち実働ガイドは60名程度（白馬山案内人組合創立100周年記念事業実行委員会2019）であることから、実働している組合員の約3分の1が回答したと考えられる。

回答者の性別は男性13名（68%）、女性6名（32%）であった。年齢については20代：1名（5%）、30代：1名（5%）、40代：5名（26%）、50代：6名（32%）、60代：4名（21%）、70代：2名（11%）であった。

ガイドをしている（あるいはかつてしていた）アクティビティについては1名を除いて全員が夏山登山を含めた複数を挙げた。ガイド経験者は全てが夏山ガイドを行っている。18名のうち14名がスキーもしくはスノーボードのガイドしており、そのうち12名は、スキー場のゲレンデでのガイド（ゲ

レンデの場合はインストラクター、以後同じ）であり、他の2名はBCのみでのガイドを行っている。12名中5名がインストラクターで、いずれも全日本スキー連盟SAJの有資格者である。そのほか、スノーシューガイドをしていると回答したものが3名おり、さらに歩くスキーや講習、シャワークライミングとの回答もあった。ガイド経験がないとの回答者が一名いたが、スキー場の従業員をしており、登山ガイドを目指している。

白馬山案内人及びその前提資格である信州登山案内人以外で所持している資格については、19人中11人がJMGA（日本山岳ガイド協会）認定のガイド資格を所持していた。BCでのスキー・スノーボードのリードガイドが可能なスキーガイドⅠもしくはⅡの有資格者も5名いた。そのほかSAJ、白馬マイスターの資格所持者はそれぞれ7人であった。

ガイド以外の仕事について、回答者19名のうち18名が有していた。なかでもインストラクターや歩荷、山岳パトロール、フォトグラファー、山小屋関連、スノーボードショップ経営、ボルダリング指導、生物調査など、登山やスキーと関連のある仕事をしている人が18人中14名であった。それ以外にも、農業、宿泊業、飲食業、建築業、建築設計、専門学校講師など多様な業種が挙げられている。7名がガイド業以外で2つ以上の複数の仕事を組み合わせている。

次いで、白馬山案内人組合に加入した理由については、回答の表現は様々であるが多くが白馬山域で山に関わる仕事がしたいことや、ガイドをしたかったからという理由を挙げている。中には勧誘されたとの回答もあるが、ガイド含め山に関わる仕事をするには組合に加入するのが当然（必須）という回答もあった。

出身地について、白馬村であるのは19人中2名であった。移住者17名の前居住地を見ると全国各地に分散しており、関東地方が7名で最も多く、うち6名が南関東（東京・神奈川・埼玉・千葉）である。次いで中部（石川・福井・静岡）と近畿（兵庫2・三重）が3名ずつ、東北（山形）、中国

（岡山）、九州（福岡）、海外（シンガポール）が1名ずつという内訳であった。白馬村出身者は40代と50代に1名ずつであった。移住者17名の移住年代を古い順に述べると1971年～1980年が1名、1981年～1990年が2名、1991年～2000年が6名で最も多く、2001年～2010年、2011年以降がそれぞれ4名、いずれも年齢から推測して20代・30代の若い時期に白馬村に移住してきていることがわかる。

移住以前の職業・業種についてみると会社員が17名中10名、自営業者が3名、パート・アルバイトが3名、団体職員が1名であった。業種については、医療・福祉から製造、飲食、建築、その他サービス業など多岐にわたる。

移住の決断要因と白馬を移住先に選んだ理由について、結婚など家庭の事情や職場など仕事の都合も合わせて6名いた。それ以外は、登山やスキーなどアクティビティが楽しめる場所として良さや景観の素晴らしさなどレジャースポットとしての魅力から選択したという移住理由が多い。移住にあたっての経済的な不安については17名中12名がなかったと回答した。逆に5名が不安をもち、その対処方法は仕事を何でも引き受けるなどが4名、日々を楽しむよう心がけたとの回答もあった。

Ⅳ 移住ガイドの移住経緯と生活サイクル

Ⅳ章では、白馬山案内人組合の組合員8名への聞き取り調査に基づき、彼らのライフヒストリーや移住理由を分析する。

Ⅳ-1 移住経緯と生活サイクルの事例

1) 20代後半男性[A氏]

A氏は福岡で生まれ幼少期を過ごした。高校卒業後、山で働きたい、山岳ガイドになりたいという思いから、2013年に登山ガイドの専門学校であるINACへ入学し、日本山岳ガイド協会認定登山ガイドステージⅡを取得した。卒業後、熊本の登山を主とする旅行会社に就職し、主に九州の山をガイドしながら約2年間過ごした。事務仕事中心の職場に不満を感じ、現場で働きたいという意思

を強くした。白馬を意識した契機は北アルプスへのツアーで唐松岳・五竜岳を案内したことであった。

その後、山小屋常駐隊の仕事が決まると、会社を辞めて、ひと夏その仕事を続けた。そこで白馬村には仕事が多いと知り、山小屋の建設作業やスキー場の仕事を人づてに紹介してもらった。住居が未確定とはいえ、年間を通して白馬村で仕事が得られると分かったので、2018年に白馬村への移住を決めた。移住後はコロナ禍で仕事が減ったものの、ガイド以外の仕事もこなしながら現在に至る。

A氏は、冬はスノーシューガイド・夏は登山のガイドを行う。スキー場でもパトロールの仕事をしている。その他に歩荷、高所作業、カモシカなどの生態調査や、夏山常駐パトロールも行う。スキー場の営業開始（例年12月）と同時にスキー場パトロールの仕事が始まる。3月でスキー場の仕事が終わると、4月から6月まではまとまった仕事がなく、単発で高所作業や歩荷の仕事が入る。またこの時期に自分の趣味である岩登りに出かけたり、黒部峡谷など他の地域での仕事をこなす。7月から8月末までは平日に夏山常駐パトロール、週末には夏山ガイドを行う。9月から10月にかけてガイドの仕事の割合が増えていき、10月はガイドのみとなる。11月は白馬地域が閑散期のため仕事はなく、旅行に出かけるなど余暇活動に充てている。

白馬村の特徴について、A氏は次のように語っている。

白馬村では、ガイドの地位が高く、職業として認知されている感じがする。そして、自宅のドアを開けるとすぐに山が見える。自宅から近いところに高い山があり、その景観の素晴らしさはここにしかない魅力だ。移住者は遊びがメインできている人が多い。決して稼ぎにきていない。実際に山小屋に常駐していた時に、登山用品店のオーナーが歩荷で上がってきて、これから仕事があるからと走って帰って行った姿をみて凄いなと思ったしリスペクトを感じた。ここでは遊んでいる人が一番偉いと感じる。

2) 50代前半男性[B氏]

B氏の出身は京都府で、沢でイワナなどを釣ることをきっかけに、中高生の時から登山を始めた。その後大学時代に本格的に山登りを始めた。当該大学の山岳部には入部せず、社会人山岳会で活動した。大学院中退後は、年1・2回海外の山に登るため、アルバイトや契約社員として働いた。仕事内容はカメラスタジオの手伝い、歩荷、農家の手伝い、クライミングジムのスタッフなどであった。ガイド資格を取得したのは1998年頃で、仕事としたのは2001年頃である。2002年から5年程度冬は白馬村、夏は三重県で2拠点生活をしていた。三重を選んだのは京都にはない山や岩場（御在所岳）があったためであった。

2000年代後半に拠点を白馬村に移し、山案内人組合にも同時期に加入し現在に至る。白馬村以外には松本市や茅野市などが移住候補地としてあった。しかし、スキーを楽しむためには白馬村が良いと感じた。また、行きたかった山である穂高岳や剣岳へのアクセスを考え白馬村を選んだ。

B氏は、一年を通して場所を変えながらガイド・カメラマンの仕事を行っている。12月から5月初めまではBCスキーのガイドを行う。そのガイド地域は白馬村のほか、北海道やヨーロッパにもわたる。4月からは残雪期の登山ガイドや、グリーンシーズンに向けた体力づくりを始める。5月に入るとガイディングはクライミングを中心に登山とスキーの三本柱となり、梅雨時期は里山や低山のハイキングガイドを行う。梅雨が明けた初夏は仕事が入りにくく、動植物（ライチョウ・高山植物など）生態調査の手伝いや、白馬山案内人組合で紹介された仕事をしている。7月から8月は例年ではアルパインクライミングの仕事のためにほとんどヨーロッパにいる。9月から11月はクライミングやハイキングのガイドをし、スキーシーズンまでの過渡期に短い休養期間がある。全てのガイド業と並行してカメラマンとしても活動する。

B氏は白馬村の特徴について、次のように語っている。

白馬の印象は、移住者の立場からして入り

込みやすい。小谷や戸隠では伝手がないと入れない。また、白馬は移住者が外から入ってくることは仕方ないことだとあきらめている印象がある。消防団や地域の維持には移住者が必要だということをわかっている。

また、登山者の立場からすると人が少なく、八ヶ岳や穂高エリアよりも静かに登ることができる。

（筆者の質問「スキーバムや遊んでいる人が偉いという感覚はあるか」に対して）バムはヒッピーとかに近い感覚。本質はスキーも登山もプロよりバムの方が偉いと思う。バムは外に向けてオレ凄いだろという人ではなく、自分の内側に満足感や達成感を求めている。YouTubeに難易度の難しい山の登山をアップして凄いだろというのとは真逆の価値観がある。都会の若い人が来るのは、都会とは違う価値観を求めているのではないか。自分も大学を出てから10年程はバムと言えたと思うが今は違う。気持ちとしては、そのような若い人がいたら応援したい。

白馬では山の仕事はいつも人手不足。コミュニケーションが取ればいくらでも声を掛けてくれる人がいる。富山県では誰かピンポイントに繋がっていないといけなのだが、白馬ではいろんな所に窓口があるようなところだと思う。

3) 30代後半男性[C氏]

C氏の生まれはアメリカで、2歳の頃、両親の実家のある札幌に戻りスキーやアイスホッケーなどをしながら幼年期を過ごした。2006年千葉県内の大学を卒業後、カナダに1年半ほど滞在し、スキー中心のライフスタイルであるスキーバムとして過ごす。2007年に日本へ帰国した後はアウトドアブランド企業の東京店舗にてアルバイトをした。この頃、東京を拠点として冬場に点々と自分の肌に合う場所を探しつつ過ごした。とくに、斜面が雪崩によって削られ樹木がない雪食地形のある場所を探していた。またスキーを最優先にでき

る環境を整えたいため、仕事との折り合いが付けやすい環境を探索し、白馬村のほか奥只見や奥会津、越後湯沢、松本などにスキーで訪れた。それらの地域も含めて移住地を検討していたところ、アルバイト先のアウトドアブランドの新店舗が2013年に白馬村に出店することが契機となり移住を決断した。

白馬村への移住後は早い時期からガイドの先輩とアウトドアフィールドに出かけ、2016年から2018年までは雪崩管理を手伝うようになった。2019/20年シーズンからBCスキーのテールガイドとしてスキーガイドを始めた。その後2021年に白馬山案内人組合に加入し、JMGAの資格も取得した。2022年からはリードガイドとしての夏山登山のガイドも始めるようになった。

C氏は大手アウトドアブランドのショップに勤め、一年を通して店舗スタッフとしての収入がある。その一方で冬季はBCスキーを主としてBCスノーボード、夏季は登山を中心にガイドを行い、小谷村で沢登りやクライミングのツアーを手伝っている。歩荷などの白馬山案内人組合としての仕事もある。C氏は会社員とガイドを兼業しているため、店舗の仕事をしつつ有給休暇をまとめて取得できるように調整し、休日の時間をガイドの仕事に充てている。BCスキー・スノーボードのガイドは、白馬に先駆けて立山で環境が整う11月ごろから始まり、6月上旬まで仕事がある。夏季の登山ガイドは2023年から始めた。

C氏は白馬村の特徴について、次のように語っている。

白馬地域の特徴は仕事と歴史がある。また、スキーバムを受け入れる土壌がある。スキーバムとされる人の割合がとても高い。山の現場にいる人に対する敬意がある。勤務している店舗も冬季は12時開店を受けいれてくれた。同業他店も足並みを揃えてくれている。

白馬村は街中からアルパインエリアまでの距離がとても近いこと。フィールドの特徴として、①樹林帯、②森林限界より上のエリア、③急峻な岩稜などアルパインエリアがあり、

標高も高くバリエーションが豊富でBCスキーエリアとして他の地域より魅力的。

4) 70代前半男性[D氏]

D氏は福井県生まれで、少年期は夏には海で家業の手伝いをしていて、登山を始めるきっかけは、大学院時代に、ワンダーフォーゲル部の友人からの紹介で、美ヶ原に行って、北アルプスを眺めていたところ、見ず知らずの方から「君は山に興味があるみたいだね、いい出会いがあるよ、片路切符をあげるから行ってみなさい。」と上高地への切符を貰う。そこで穂高を見て感銘を受け、相部屋となった登山者から登山はいつでもスタートが切れると背中を押されたこと、それからは個人で登山にのめりこんでいった。

剣沢で山小屋主人が事故の現場に駆け付ける様子や、山の上での人情味のある出来事に惹かれ、剣沢小屋への就職を考える。しかし求人の枠がなく、代わりに剣岳が見える唐松頂上山荘に就職した。これを機に1977年に移住し、それ以来唐松頂上山荘に勤めた。白馬山案内人組合へは1980年代前半に加入し、山荘の仕事以外にもレスキューなどにも係わる。山小屋業務が中心で、外部の人に対して個人ガイドをすることはほとんどない。

D氏は、2021年に小屋を下り、山小屋の管理を行う会社に勤める。時折、レスキュー隊や建設スタッフなど山小屋関係者へのガイディング、社内スタッフの入山及び下山時にガイディングを行うことがある。その他、顧客である登山者に安全に関するアドバイスなどを行っている。山小屋は例年4月28日ごろから営業開始し、ゴールデンウィーク後にいったん小屋を閉める。6月から再開し、グリーンシーズンが終了する10月半ばまで営業する。山小屋が営業しない時期には、山小屋の修繕・建設についての打ち合わせや外部との交渉を行う。

D氏が語る白馬村の特徴は次のようである。

白馬地域の特徴として、山で働く人を受け入れてくれている。また山へ関わる人物への理解がある。山は恵みをもたらすものであり、

私たちは天から降ってくる水や恵みを最初に使わせていただいている。山と分かťことができない。若い人であっても自然の恵みを頂いている場所であるという意識や白馬のもつ気質のようなものを感じとっているのではないかな。

5) 30代後半男性[E氏]

E氏は1980年代に日本で生まれ、幼少期は海外で過ごした。大学時代は日本に滞在したが、その後イギリスの大学院に進学し、2012年からは社会人として東京に戻った。この頃友人に誘われ登山を始めた。2015年頃には会社を辞めて千葉に移住し、フリーランスとして農業やアルバイトをしながら夏期は趣味として登山を、冬期は白馬で住み込みの仕事で働きながら幼少期から好きだったスキーを楽しむという2拠点生活を始めた。2017年以降、夏はシンガポールで、冬は白馬でという生活を送る。この頃雪上での仕事への思いや2拠点生活の移動の苦勞、山への愛着の増加から2020年に白馬への移住を決めた。2023年にガイドだけでなく山に関する様々な仕事への興味をもち、山に関するスキルアップや人とのつながりを求めて白馬山案内人資格を取得した。将来はゲストを案内して登ることを目標に活動をしている。救助活動にも関心があり、今後は資格取得を通して仕事と活動の幅を増やすことを考えている。

2024年現在E氏が白馬で生活を始めて4年経ち、その間に様々な仕事を経験した。現在の主な仕事として、12月からゴールデンウィークまでのスキー場パトロール、5月末ごろから11月までのグリーンパトロール（索道会社の関連団体が管理する。先述の夏山常駐パトロールとは異なる）の業務に就いている。グリーンパトロールは少人数で業務が分担され、シーズン中はひと月あたり10日程度の勤務がある。夏季の仕事を探すことに苦勞しており、以前は農業法人でアルバイトをしたり、白馬連峰の山小屋で働いたりした。また5月と11月は閑散期で、自分の好きなことやスキルアップにむけた勉強などに時間を割いている。

E氏は、白馬村の特徴を次のように語っている。

白馬地域の特徴については、白馬に来る人は、自分がやりたいことを楽しみたいというのが最初で、ロジカルというよりパッションで来る人が多い。やりたいことがあって、自分に足りないものを見つけてやっていくというかたち。仕事より遊ぶことを優先するような空気がある。

また、海外の人が多いのも特徴。海外の人の方が、遊び方が上手い。変なアクティビティを作り出したりする。野沢温泉と比べると、野沢温泉の方は、コミュニティが狭くてローカルな繋がりの方が強い。最近は自分も長期スパンでのことを考えないようになってきた。今やりたいことに集中した方が良いのではないかと思うようになった。

6) 60代前半女性[F氏]

F氏は大阪に生まれ、幼少期にはスキーをしに白馬に来た経験をもつ。1980年代にアメリカの大学に留学後、東京で働き始めた。登山を始めたのは高校生の時で、20代は個人で、30代は夏に月2回ほど日本アルプスに登っていた。白馬へと移住したのは仕事を辞めた2015年である。高校・大学時代から白馬五竜スキー場の麓にしばしば手伝いや遊びに来ていた宿に、誘われたためであった。宿の手伝いから始まりそのまま居つくかたちで移住した。2017年に信州山案内人の資格を取得し、白馬山案内人組合にも加入した。2020年にはJMGA登山ガイドステージⅡも取得した。

F氏は、語学力を活かしてインバウンド客を対象としたガイド業務を担当するほか、一年を通して多種多様な仕事に就く。12月にスキー場の営業が始まると、個人・海外の方向けにインストラクターとしてゲレンデでスキー・スノーシューのツアーを担当する。それが5月初めまで続き、修学旅行シーズン（5月頃）にはペンションで宿泊業の手伝いに時間を割く。6月から徐々にグリーンシーズンの仕事に移行し、9月末まで登山と沢登りをガイドする。顧客には海外の方が多い。10月

は一年のなかでも仕事がまばらで自由な時間が楽しめる。10月後半から11月には、道路工事等の散発的な仕事が増える。すべてに並行して月に数回程度はボルダリング教室のスタッフとして従事する。また、村内の農作物の生産や収穫・製品加工するコミュニティにも積極的に参加している。

F氏が語る、白馬村の特徴は次のようである。

白馬地域は、大自然でありながらも、街からのアプローチが近く、山を降りてきてからも楽しめる場所。

仕事の紹介は、山案内人組合というより、人の繋がり。小さい親分のような方が沢山いる。

7) 70代前半男性[G氏]

G氏は福岡に生まれ、幼少時に兄に連れられ山に登ったことがきっかけで少しずつ登るようになった。社会人時代に大阪の山岳会に加入しラグビーと山を楽しんだ。しかし、会社でインドネシア転勤を命じられたことで同社を辞め、1970年代後半に白馬に移住し山小屋の小屋番を8年ほど勤めた。その間にはヨーロッパに山登りに出かけた。しかし、山小屋勤務では最良シーズンに登山ができないことからそれを辞めて土木建設業とガイドで生活するようになった。ヨーロッパでの活動期間を経て、現在は白馬や北アルプスの山を中心にガイド活動をしている。

G氏は12月のスキー場の営業開始とともに、除雪作業や駐車場に関連する業務に当たる。4月半ばにその契約が満了になると、5月は自由な時間が多く、趣味のサイクリングやダイビングなどの余暇活動を満喫する。6月はトレーニングと健康管理を兼ねて山に登り、体力づくりをする。グリーンシーズンの7月から11月までは、旅行会社から受託する登山ツアーのガイドの業務で忙しい日が続く。時期によっては白馬連峰に加えて立山方面もガイドする。

8) 50代前半男性[H氏]

H氏は兵庫県に生まれ、登山好きな親の影響で、物心つく前から山に登っていた。当時は六甲山や

兜山などが主な目的地であった。高校や大学では山岳部に所属せず、大学卒業後、スポーツ用品店の勤務をへて、山とスキーを領域とするガイド会社に入社した。これを契機に白馬をフィールドに冬はスキー、夏は登山のガイドを始めた。1995年に日本山岳ガイド連盟に加入し、翌年には白馬山案内人組合にも入会した。1990年代後半は日本百名山や中高年登山ブームであり、会社の仕事として全国各地の山々をガイドしていた。結婚後子どもができたことや、ツアーの多さに自身の望む仕事との違いを感じたことをきっかけに会社を辞め、それ以降は個人ガイドとして活動している。

H氏は、12月から3月末までインストラクターとしてスキースクールでレッスンを担当する。それが終了すると、2週間ほど休養期間をとりプライベートや家族旅行に充て、4月末から5月中ごろまでBCスキーのガイド業務を行う。6月前半は再び自由な時間があるが、かつてはこの時期に動植物の生態調査を手伝うこともあった。6月後半には複数の山小屋の建設整備作業に参加し、7月初旬には鎖場の点検や草刈りなど登山道整備の仕事を受け持つ。夏の間は10月まで登山ガイドとして活動する。10月に再び登山道の整備をした後、10月末の山小屋撤収作業をもってグリーンシーズンを終える。11月は閑散期で3度目の休養期間をとる。

H氏は白馬村の特徴について、次のように語っている。

白馬の特徴は、ガイドをする上でも、悪天候の時に里で遊んだり、ご飯を食べたり、お風呂もあるので案内しやすい。それに比べると北アルプスの他の麓の場所は何もないところが多いし、中心地から遠いところが多い。山が近くアプローチが近いので天候を見てから出かけられる。妙高や野沢温泉との違いはスキーだけではなく登山をやる人が多い。

白馬では地元の知人から仕事の声が掛かる。シーズンの端境期は、知り合いから頼まれて土木建設業に従事した。林道整備やロープを使っのノリ面整備、土留めの布団かご

を作る仕事等、重機が入らないところの仕事が多い。総じて、土木、建設、農業、スキー関連の仕事が多い。

Ⅳ-2 移住経緯と生活サイクルの特性

1) 移住理由と白馬村の地域特性

Ⅳ-1で述べた移住ガイド8名について、どのような理由で移住したのかを白馬村がもつ地域特性と関連づけて検討すると、次の8つの点に整理される。

①「街とアウトドアフィールドの近接性」A氏、C氏、H氏がこの点を指摘している。これは、ガイドをする場合、天気をみてから出かけられるなど、ガイド業務への好影響がある。また店舗勤務のC氏のように午前中のスキーアクティビティ、午後の出勤を可能にし、本人の望ましいライフスタイルを実現するのみならず、最新の情報提供が可能になるなど店舗での接客業務にも好影響があることがわかる。

②「他のガイドフィールドとの位置的な優位性」B氏は、また前出の3人とはやや異なるが、立山・穂高などへの行きやすさを挙げている。

③「白馬の街の利便性」F氏、H氏がこれを指摘している。白馬村内にカフェやレストランなど飲食店が多いことや、さまざまな遊び場所があることも魅力の一つとして挙げられている。

④「年間を通して仕事を得やすいこと」A氏、B氏、F氏、H氏が、これを指摘している。ガイド以外の仕事の紹介を地元の知人から得ている。多くの場合、周囲のネットワークを介して時機を得た仕事が回ってくるのが重要である。

⑤「山の仕事に関わる人への理解の高さやガイドの地位が高いこと」A氏、C氏、D氏が、これを指摘している。

⑥「移住者を受け入れる素地や環境がある」B氏、E氏がこれについて述べている。

⑦「バムなど趣味的な人を受け入れる土壌がある」A氏、B氏、C氏、E氏がこれを指摘している。ここでは「バム」は仕事より趣味を優先するライフスタイルを指すと言って良い。「バム」は、ア

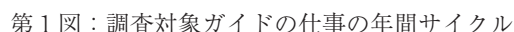
⑨「外国人の多さ」E氏がこの点を指摘している。2000年代以降の特徴ではあるものの、多様な文化が共生している点も見逃せない。この点も外部の人間が地域に入り込みやすい点と関連しているものと思われる。

次に、職業選択・年間サイクルについて整理する。今回聞き取り調査に応じた8名は、それぞれ通年の仕事の仕方が異なっている(第1図)が、主に3つのタイプに分けられる。すなわち、通年雇用、通年ガイド、多様な仕事の組み合わせである。

①「通年雇用」C氏とD氏は通年雇用の会社員であり、このうちC氏は店舗業務と並行してガイド業務を行っている。休日を利用して冬季や残雪期はBCスキー、夏季は夏山登山や沢登りやクライ

③「多様な仕事の組み合わせ」それ以外の5名は、冬季はスキーインストラクターを含むスキー場での業務と夏山での登山ガイドやパトロールを組み合わせ、さらにその端境期に歩荷や山小屋建設、高所作業、ペンション業務、ポール立て、側溝掃除など多岐に渡る業務を挟んでいる。F氏はその中で、通年でボルダリング教室のスタッフも行っている。スキーシーズンと夏山の端境期については、F氏やH氏は、知人からの紹介で仕事を行っていると言っている。

本章では、白馬地域の持続可能な発展に大きな役割を果たしてきた白馬山案内人組合の組合員において、今もなお、なぜ多くの移住者を受け入れ



– 122 –

ることが可能なのか、移住を持続的に可能にしていく要因について考察する。

アンケート調査及び聞き取り調査の結果から、調査対象者は、白馬村で冬季のスキー場関連の仕事と夏山登山に関連するガイド業やパトロール業を生業の中心に据えつつ、さらにその端境期に多様な仕事を有している。例えば、山に関わるものでさえ、歩荷や小屋明け小屋閉め、アウトドアスポーツ用品ショップ経営やボルダリングジム、さらには生物調査までさまざまである。また飲食や宿泊など観光全般に関わるものから農業、専門学校講師など観光と直接関係のない仕事もあった。このように一年を通して多様な仕事を得ることができる環境が整っていると言える。

さらに、B氏の言及「山の仕事はいつも人手不足。コミュニケーションさえ取れば、いくらでも声を掛けてくれる人がいる。」のように、山に関わる仕事が多くある。これは、野沢温泉や妙高・戸隠、立山のそれと比較した場合、特定の人とのパイプの有無や、地元の人との人間関係の濃淡による影響が少なく、比較的広く、さまざまなところから仕事の依頼があることに基づく。この緩く広い人的ネットワークは、各時代において、さまざまなタイプの移住者を受け入れてきたことと無関係ではないと考えられる。スキーブーム期にペンション経営のために移住してきたものや、1990年代以降、自身の好きなスノーアクティビティを生活の中心に据えるバム的生活を送るために移住してきたもの、さらに「JAPOW」を求めてきた外国人がホスト化したものなど、移住者の形態も多様である。そのような多様性が緩く広い人的ネットワーク形成に関係していると考えられる。また、そのようなネットワークから豊富な就業機会が得られることが白馬村の特徴といえる。

その上で、山の仕事をしている人に対する地域の人の敬意や理解、登山ガイドが職業として認知されているなどといった目に見えない文化がみられる。さらには、スキーや山登りなど趣味をライフスタイルの中心におく「バム」と呼ばれる人達が一定数存在しており、「遊んでいる人が一番偉

い」とまで感じさせる空気があることが、アウトドア愛好者の移住者を惹きつけていると考えられる。それゆえに、豊富で多様な就業機会とガイドを含めた山の仕事を尊重する地域文化が形成されてきたことなど諸要素から、白馬地域にはアウトドアスポーツを生業にする移住者が後を絶たず移住してきている。

最後に白馬村が有する自然環境の特異性も指摘しておきたい。白馬村内の八方尾根などは、前述の野沢温泉や妙高赤倉などと並んで日本有数のスキーリゾートとして位置づけられる。しかし、野沢温泉や妙高赤倉はともに温泉地で、冬はスキーリゾートとして機能するものの、夏季は山岳リゾートとしての性格が弱い。ともにゴンドラリフトの夏季営業など夏季の山岳資源の利用はあるが、白馬と比較すると、標高や周囲の山岳などからみると山岳資源の稀少性がかなり弱い。それに対して白馬村では3,000m級の山岳へのアクセスに優れる点が移住者ガイドをひきつける大きな要因になっている。

VI 結論

本稿では、白馬地域の持続可能な発展に大きな役割を果たしてきた「白馬山案内人組合」の維持要因を、移住者の継続的存在や白馬村の地域特性とともに解明した。その結果、明らかになったことは次のようにまとめられる。

白馬山案内人の組合員は冬季のスキー関連の仕事と夏季の登山関連の仕事を基本としながらも、それ以外の季節に、多岐にわたる仕事を行っていることが明らかになった。

組合員の移住動機として、年間を通して仕事が得やすいこと、山の仕事に関わる人への理解や敬意があり、ガイドの地位が高いこと、閉鎖的ではなく移住者を受け入れる素地があることなどが明らかになった。またライフサイクルでは、冬季のスキー場関連業務及び夏季の登山関連業務を中心に、端境期に様々な業務を掛け持ちしていた。それらの時期ごとの小さな業務を仲介するネット

ワークの存在も明らかになった。さらには白馬地域の特徴として「バム」と呼ばれるスキーや登山などアウトドアレジャーをライフスタイルの中心におき、仕事より遊んでいる人が尊ばれる空気が出アウトドア愛好者の中に存在していることの重要性も示唆された。もちろん、白馬村が有する背後の山岳地域の稀少性が、移住者ガイドを継続的に生み続ける要因になっていることも重要である。

このように、白馬地域は日本の山岳観光の中心地でありながら、持続可能な山岳観光のあり方を

示す先進地域でもある。しかし一方で、インバウンド観光の発展がもたらす課題なども浮き彫りになってきた。それらの課題を解決するためにも、近年その存在感を増している外国人アクターとのコミュニケーションや協業が課題となっている。山岳観光が山間地域の持続可能な発展を可能にするのであれば、それらの問題を解決していくことが求められている。これからも白馬地域と白馬山案内人組合の取り組みに注目してゆきたい。

現地調査に際しては、白馬山案内人組合の降旗義道様、松澤幸靖様、舎川朋弘様、西村基男様、久田重太様、横山秀和様、武藤慶太様、聞き取り調査及びアンケート調査に快く応じていただいた組合員の皆様、株式会社白馬館の松沢貞一様、白馬村役場の山岸大祐様、白馬村教育委員会事務局の渡邊宏太様、山の道具ラッ皮的の松本聡様に多大なご協力を頂きました。また本稿の執筆にあたって、筑波大学地誌学分野の教員および院生諸氏に貴重なご助言を頂きました。末筆ながらここに記して厚く御礼を申し上げます。なお、執筆はⅠ・Ⅱ・Ⅳ－２・ⅤおよびⅥを佐藤、Ⅲを黒田、Ⅳ－１を林が執筆し、全体の調整を佐藤および呉羽が行った。

【注】

本アンケート調査は筑波大学生命環境系倫理委員会の承認を受けている（課題番号第2024-3号）。

【文 献】

浅川伶子（1964）：積雪寒冷農業地域の観光化現象―長野県白馬村の場合を中心に。地理学報告，**21**・**22**，32-44。

石井英也（1977）：白馬村における民宿地域の形成。人文地理，**29**，1-25。

白田 明（2013）：『日本のスキー・スケート―明治・大正期の長野県』信毎書籍出版センター。

呉羽正昭（2009）：日本におけるスキー観光の衰退と再生の可能性。地理科学，**64**，168-177。

坂本優紀・吉沢 直・呉羽正昭・山下亜紀郎・佐藤大輔（2020）：長野県白馬エリアにおけるグリーンシーズンの山岳ツーリズムの特性―山岳リゾートにおける訪問者分析に基づいて。人文地理学研究，**40**，1-12。

「白馬のあゆみ」編纂委員会（1994）：『白馬のあゆみ（白馬村史）第4巻観光・登山・スキー編』白馬村。白馬山案内人組合創立100周年記念事業実行委員会（2019）：『白馬山案内人組合創立100周年記念誌 百年の息吹』

福井幸太郎・飯田 肇（2023）：飛騨山脈北部の現存氷河の特性。日本地理学会発表要旨集，**103**，28。

細野スキークラブ（1989）：『細野スキークラブ60年史』細野スキークラブ。

松村健太郎・山本 純・佐藤大輔・呉羽正昭（2019）：中央アルプスにおける登山ガイドと地域とのかかわり―伊那市・駒ヶ根市における関係組織の分析―。地域研究年報，**41**，1-19。

吉沢 直（2022）：長野県白馬村のスキーリゾートにおけるホスト化した外国人の役割―リゾート発展プロセスにおけるアクターの変遷に着目して―。地理学評論，**95**，1-24。

白馬山案内人組合ホームページ<https://hakubaguide.com>（2024年8月6日閲覧）